

# 両手描き

—— 発達的要求に応じつつ、美を創造し、受容する ——

## 平岡節

ドイツの児童心理学者 W. Gröninger が幼児に両手を同時に動かして描かせること——bimanual——についておもしろい研究をしていることを知ったのは四年前のことである。以来それによって実験してみたうち、スクリブルについて述べてみたい。その前に

(1) 幼児に「絵を描かせたり、ものをつくらせる第一の目標はどこにおくべきか」ということを考えてみる。幼児は眼にふれるものは手当り次第にさわってみる。幼児に「さわってはいけません」ということは殺人的命令である。幼児はその発達上の特質からみて、先ず触知覚を通して外界のものを認識する。さわること、すなわち手の皮膚によって、その物がかたいか、滑らかであるか、またその形などその物の一切を感じとる。おとなはその点が違っている。おとなは過去の経験によって視るだけでその物をかなり正確に認識出来る。おとなでも今までに見たこともない物に接する時触れてみて初めてよりよく認識出来ることはよくあることである。

幼児がよく手で物をさわることは、その他筋肉運動の発達からくる要求であることは、いうまでもない。

そこで幼児期の絵画・製作の目的は美的観念・創造力・思考力・実践力・技術の向上などを挙げることはもちろんであろうが、それより前に、筆やクレオンをもって描いたり、物を切ったり、曲げたりひっぱったりする指先き、腕の運動および手の皮膚を通して物の性質を究明し認識すること、いい換えれば、発達的要求に応じて、自分の体と自分の周囲にあるあらゆる物をじゅうぶんマニピュレート(manipulate)させることにあると思う。幼児は身体と物を思う存分マニピュレート(manipulate)する間に、他の面の発達・筋肉運動・視知覚記憶・大脳皮質の統制作用——にともない、物の色・形のバランス・シンメトリー・リズム・パターン・デザインなどを感じとり、やがて生活に即しつつ、絵を描き、ものを作る本来の目的活動に興味を覚えるようになる。

(2) そこで両手描きのスクリブルに問題を移してみる。その活動の中には (イ) 利手でない方の手も利手同様に動かして描く。(ロ) スクリブルをするという二つの活動が含まれている。

(イ) については、左右の手が身体構造上シンメトリーであることと両手の機能の分化過程(9月号参照)からみて、幼児に片手だけの使用を早くから強要することはおとなと異なった問題があるはずである。事実幼児の活動を観察してみると *bimanual* (両手で扱う) なるものが非常に多い。水遊び、どろんこ遊び、フィンガーペンティングをよるこぶのいろいろな理由はあがるが、この *bimanual* (両手性) からくるよるこぶも大きいと思う。実験中にも子どもは最初の緊張は次第にほぐれ、足をバタバタさせたり歓声をあげ次ぎの用紙を性急に請求したりなどよるこぶの表情を示した。すなわち、身体構造上のシンメトリーからくるリズム的快感、両手の機能の未分化からくる現象とみられる。またさき頃描画に用いる利手の調査をしてみたところ、比較的文化的影響の少ないと思われる施設の子どもは両親の揃った一般家庭の子どもより、両手を用いることが各年令(二才―五才)を通じて多いことがわかった。

してみると *bimanual scribble* (両手描き) は、文化的・概念的な手の使用を強いることなく、自然な発達、健全な発達のために望ましい経験となるのではなからうか。

(ロ) 次にスクリブル片手―について、先ず発達過程の最初にあらわれるものは、絵になっていない絵、前描画活動として、比較的簡

単にあつかわれているが、このスクリブルは、幼児の内的発達と有機的に深い関係があるものである。また幼児が絵を描く段階になって一度は概念的描画の傾向をあらわす。この傾向は幼児に範ちゅう的態度が出来るようになる当然みられる現象で、むしろ好ましいことである。しかしこの傾向が固定してしまうことは問題である。

この対策はいろいろあろうが思う存分スクリブルをやらせることも一つの方法である。この場合に用いるスクリブルは、描画の結果を重要視することからくる一種の劣等感と描くという意識は後退し、腕を動かす身体的リズム感からくる快感、情緒の開放が主体となるからである。アメリカの美術教育家ケイン(Caine)はスクリブルを専門の美術家教育に用い、その作品のマンネリズム化を防いで成果を上げていくし、心理学者ピアソン(Pearson)もスクリブルが性格判断と情緒の開放に役立つといっている。

(3) この辺で両手によるスクリブルの実験の結果について述べてみたい。対象としては両手の使用についての文化的影響―階層差と描画経験の相異などを考慮に入れ、一才から六才までの幼児一四名について調べてまとめた(9月号参照)。

以下に示す例画の筆蹟に合わせて空中で自分の腕を肩からじゅうぶん動かしてみると今から述べるものがよく理解出来ると思う。

× × ×

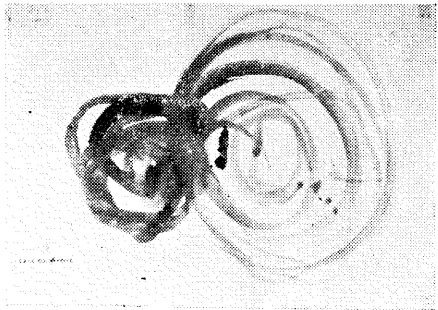
Grozierger はこの *bimanual scribble* は呼吸運動に合致している、  
と述べている。例画 1・3 は三才以後の子どもがほとんど最初に



1



2



3

示す形で、三才以前の子どもは例2のような腕の運動を示している。すなわち腕を上にあげる時は吸気、下げる時はいきを出す時の運動である。例3に見るように最初の頃は両腕の運動差が大きいが、その差は年令の若いものほど少なく、また早くなる。それは大体三才前後を境としている。これは腕の運動の発達と手の機能の分化過程を示しているようである。

X X X

各年令を通じて、その表現形式は一枚目から二枚、三枚目と相互に関連をもって変化発展し、シリーズをなしている。それを大別してみると、三、四才までは運動に訴えるリズムが主体であるが(例

4) 四、五才児になると運動的リズム感よりも視覚に訴えるリズムが主体となつていく(例5)。これは三、四才までは自分の体をマニピュレート(manipulate)しているが、四、五才になればその段階を過ぎて形をマニピュレート(manipulate)している。

このシリーズは非常に勢いで矢継ぎ早に描き上げる。このようなことは普通の描画の時にもよくあり、「紙芝居だ」と称するものと同じ傾向である。

X X

これらのシリーズの中に円、点々、縦線、横線、十文字、箱形、対角線など絵画的表現形式の基本となる腕の運動と形を自由に創造している。これは四才頃から一般に空間知覚の発達する時であり、その発達上の要求をみたしつつ、絵画的表現形式を習得している。両手のスクリブルをしている時、腕の運動が左右均衡を失って形のバランスがくずれた時、その不均衡を修正しているのをよく見かけた。子どもは描きながら、手を左右交差させて使うなど身体的バランスに興味を示している。この身体的バランスに関する興味は幼児の遊びにもよく見られる発達上の特質である。

X X

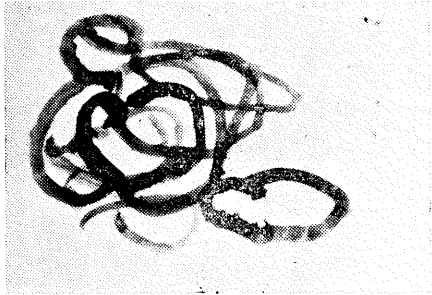
この両手描きを重ねている内に、絵を描くという意識は消え、身体的活動—両腕の同時運動と呼吸運動—とそれに伴うリズム的快感および視覚的リズム感—バランス・シンメトリー—など形の調和についての興味が主体となることを示している。

このような形に対する興味は、幼児の遊びの中にも融合している事例を見出すことが出来る。「糸とり」は両手を同時に同様に動かす遊びである。すなわち糸は左右同形の線のシリーズであり、binannal scribble (両手描き)と同様、手近かな表現材料を用いた遊びであり、糸の織りなす形に視覚的、具体的主題を与えたものである。その他「石けり」「陣とり」なども地面にいろいろの形を描いての遊びである。これらは空間の中の秩序を求める要求であろう。

4 の 1



4 の 2



4 の 3



4 の 4



X X X

なお両手描きをさせた後、片手で描かせてみたところ、この両手描きの時に覚えた快感をそのままに、あるものは平素より大胆に(例6)あるものは流れるようなリズムミカルな線をつくり(例7)また構造的に優れたものを描いた(例9)これらのことは小学校低学年にもみられた。例8の左すみの「」字形な紙面に対する空間的認識を示すものとみることが出来る。例9の題材は平凡であるが、流れるような、しかも大胆な筆勢の花を左上角から描き筆にふくまれた絵具があるだけ一いきに描き上げ、画面をみつめていたが、もう一度絵具をたつぶりつけて右下の余白に力強いマッスをつけ加えた。そして「ホッと一いき入れて出来上った」とにっこりした。この最後

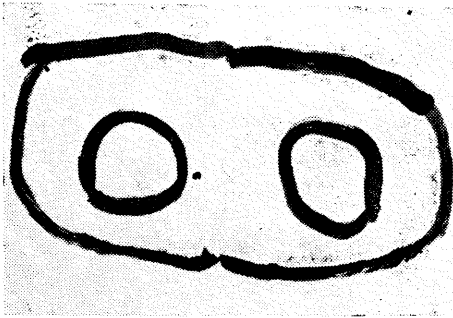
のマッスは全体をひきしめている。このような構図は紙面に対する空間的認識、形の美しさに対するセンスを習得していることとみる。このセンスは幼児期にはとくに理解ではなく、感じとる経験を通じて養われるものである。

X X X

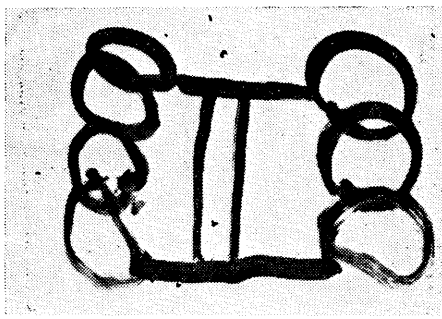
bimanual scribe (両手描き) の後このような好結果を得る度

合は両手描きの間の情緒的開放度―主観的にみて―と比例するようである。したがってこの両手描きをする前に、両手を同様に動かすリズム活動―飛行機、蝶、泳ぎなど―のような身体的バランスのとれた活動や愉快な経験を与え、情緒的開放を容易にさせた後、これ

5 の 1



5 の 2

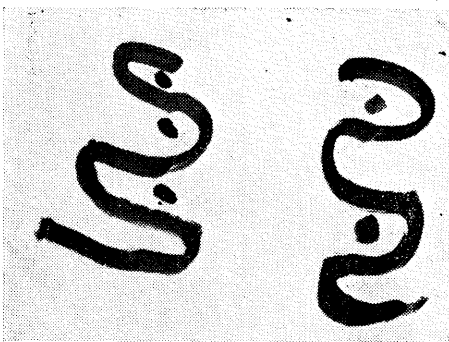


をおこなわせてみると一層効果があったように思われる。また腕の運動がじゅうぶん出来るよう用紙は四つ切りのような大きいものを与え、枚数も制限せず、興味の集中している間―疲れるほどやらせることは問題である―続けさせることが好ましい。

(4) 以上のことを総合的に述べてみる(文中、を付した所)と

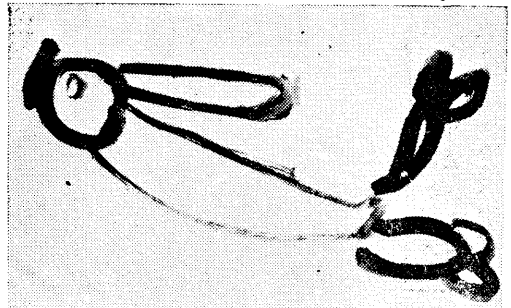
●各年令を通じて bimanual scribe (両手描き) は呼吸運動と腕の筋肉運動を主体とする描画的活動で、これは身体構造上のシンメトリー・両手の機能の末分化からくる要求を満たし、その運動に伴うリズム感とは神経的エネルギーを経済的に使用する結果、緊張をほぐし、くつろぎ―情緒的開放を与える。

5 の 3

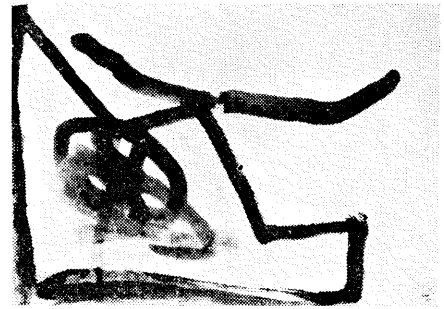


5 の 4





8



9



創造し、感じとらせることが出来る。

●最近の幼児の絵画教育には Alschuler と Hatwick の色彩と性格の研究・ポスターカラーの使用などから「ぬる」傾向が強いようであるが腕の種々の方向をもった運動を円滑にして、「描く」ことを忘れてはならないと思う。

- これは筋肉運動の発達の著しい幼児前期にあつては両腕をマニピュレート (manipulate) しつつ、運動の円滑・統制などの発達を促がす。
- 幼児後期にあつては、記憶の発達、その他の内的発達の結果空間知覚が著しく発達するが、この両手描きにより、その発達上の要求をみたし、形のリズム、バランスなどの興味とセンスを与える。
- しかも副産物的には客観的思考の早熟を防ぎ、概念的描画の傾向から脱出させることに役立つ。このことは、また幼児前期から後期への描画活動の発達を円滑にさせる結果となる。

●またこのスクリブルによって、絵画的表現形式の基本的なものを

に遂げさせたいものである。

(愛知県立女子短期大学)